

# 常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年12月9日(金)

その2 通算287号

## ◇ 正しくきたえる身とところ②「かけ足訓練・マラソン大会」

今年の「かけ足訓練」で目を引いたことがある。  
1・2年生の頑張りだ。



かけ足訓練期間中の午前中の授業は5分の短縮。  
5分×4時間で20分の時間を生み出し、2限後の  
かけ足訓練に充てるわけだ。こうすることで、子供  
たちが楽しみにしている長放課の時間は確保する  
ことができる。流れとしては、かけ足訓練を行った後、そのまま長放課に移行。  
着替えや移動の手間を省くには、ちょうどいい。

「長放課も、そのまま走り続けてもいいよ」とはいうものの、児童の大半はブラン  
コなどの遊具に移動して、各々で体を動かす。ところが、今年はけっこうの数の  
児童が走り続けている。特に目立っていたのは、低学年の1年生と2年生だ。



やる気があり、  
進んで取り組め  
ること。そして、  
挑めることが、  
大変素晴らしい。

かけ足訓練を経験することは、「走っている最中は息苦しくなる」ことや、「走  
り終えた後に疲れがくる」ことも経験したということである。経験し、理解した  
上で「かけ足を続ける」選択をしたということは、言うなれば「覚悟」である。  
そして子供たちは、「かけ足を続ける」ことにブランコ等で遊ぶ以上の「すてきな  
価値」を見出しているとも受け取れる。それが「走る楽しさ」なのか、「走り終え  
た後の清々しさ」なのか、「友達と一緒に行動する面白さ」なのか、「負けん気」  
なのかは分からない。けれども、覚悟しての選択は、心身を正しく鍛えるための  
【挑みの芽生え】なのである。今後、多方面で、いい形で表出されていくだろう。

転倒して両膝小僧をすりむき、痛みで涙があふれても、最後まで走り続けた1  
年生のCさん。苦しくてもレース中に足を止めず、最後は残る力を振り絞って走  
る速度を上げたEさん。それぞれの【挑み】に、正しく鍛えた身と心が見えた。

中学年（3・4年生）レースが始まった。

雷管の炸裂音とともに始まった中学年レースで、序盤から猛烈な勢いで集団から抜け出したのが、4年生のRyuさん。強い走りに込められたRさんの思いは、痛いほどわかる。

令和4年・中学年レース



遡ること2年前。前年優勝に引き続き、Rさんが連覇をねらっていたレース。ライバルを終始リードし、外周コースから校内に入って、最後のトラック1周。

Rさんの最後のギアチェンジで引き離し、「勝負あり」と思った時、ライバルAさんが驚異的なスパートで差し切る。



レース中、序盤から常にリードを保ちながら、最後の最後、50 cmの差で涙(泣)。

そのときのRさんの対応が実によかった。激しく落ち込むわけではなく、後悔してしよげかえるわけでもなく、自分の悔しい気持ちをすぐに1年後の大会に切り替えていた。小学校2年生である。なかなかできることではない。

そして翌年、大会を1か月後に控える頃のことだ。Rさんは足に骨折を負う。リハビリ期間を終え、何とか大会には間に合ったものの、長期の松葉杖生活で筋力が低下して思うように体が動かず、歯がゆさを感じながらのレースだったが、レース後の反応からうかがえた。3年生で優勝、結果を残せていてもである。

この時に何となく理由を察する。Rさんがねらっていたのは、学年優勝ではなく、3・4年生を合わせた中学年での優勝なのだ。しかも当時の4年生は、Sさん・Cさん・Hさん・Rさんと強豪ぞろい。

けれども、ねらうには理由がある。1年生で一緒に走った低学年レースで、優勝はできなかった(3位)ものの、勝負に値するレースを経験していた。

だから学年で優勝しても、全体4位という結果を苦汁で受け止めたのだ。

令和元年・低学年レース Rさん(1年)



そして、体調万全で臨んだ今年のレース。

結果は、大会記録まで2秒に迫るぶっちぎりの優勝だが、すでにRさんの気持ちは切り替えられている。来年、Sさん・Cさん・Hさん・Rさんと一緒に走る上学年のレースであろう。4人と戦う最後のレース。今から来年が楽しみである。